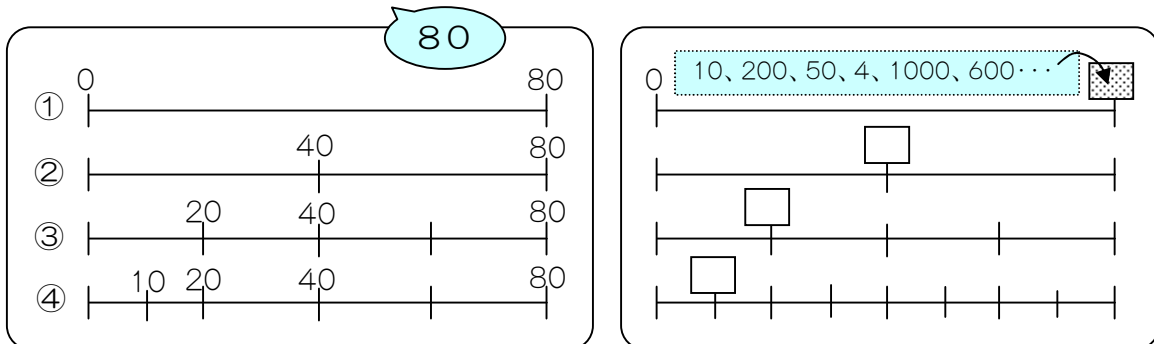


素地となるドリルのススメ

学習後の計算ばかりではなく、以下のような多様な学習の素地となるドリルを継続的に行うことも大切にして欲しい。

例1：「線分」目盛り打ちドリル

一定の長さの線分図を与える。次に、例えば「全体『80』」等と伝える。そして、以下のような手順で目盛りを打たせる。 *条件；フリーハンド、短時間（瞬時）



「7の段」、「4の段」・・・という、かけ算九九の暗唱ドリルのように「60」、「4」・・・と伝えながらスピード感のあるドリルを重ねると、量の感覚、単位の考え、等分の考え、分数の考え、連続性・稠密性等々、様々な学習の素地として役立つ。

例2：「0」の個数当てドリル

大きな数は、子供にとっても身近なものではなく、量感を養いにくい。そのため、「十」「百」「千」「万」「百万」「十億」・・・といった数を伝え、その数の「0」の個数を瞬時に言わせる。

- 「十」・・・「0」が1個。
- 「百」・・・「0」が2個。
- 「千」・・・「0」が3個。
- 「万」・・・「0」が4個。
- 「十万」・・・「十」で「0」が1個と、「万」で「0」が4個だから、「0」が5個。
- 「1千万」・・・「千」で「0」が3個と、「万」で「0」が4個だから、「0」が7個。
- 「1億」・・・「0」が8個。
- 「1兆」・・・「0」が12個。
- 「百億」・・・「百」で「0」が2個と、「億」で「0」が8個だから、「0」が10個。

これも例1と同様に、スピード感のあるドリルを重ねると、数としての量感が養われると同時に、基本となる4つの位の意識も高まってくる。

また、けた数を問うと、「0」の個数に1を加えて答えるようになってくる。